

Title	『いつく島御縁起(上)』 解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1993
Jtitle	三田國文 No.19 (1993. 12) ,p.35- 42
JaLC DOI	10.14991/002.19931200-0035
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19931200-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『いつく島御縁起(上)』解題・翻刻

石川 透

解題

室町物語「厳島の本地」は、松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』)に、十七本の伝本が紹介されている。本地物の作品群は、江戸時代中後期にも多く写されているから、これら以外の写本も現存しようが、ここに紹介する写本は、江戸初期の写しと思われるものである。残念ながら後半を欠くが、冒頭に諸本にはみられない序文のような記述がある。本書を書写した時に書き加えたものであろうが、本地物系室町物語の巻末によくみられる、

此ほん老年に一度二どよめは、子そんはんせう、後生まてうたかいなし。

というような内容もあり、興味深い。本文は、「現存本簡明目録」にいうC系統に属し、やはり、諸本とは異なる点がみうけられる。

本書の書誌は、以下の通りである。

所在、架蔵

形態、袋綴、一冊

時代、「近世初」写

寸法、縦二三・八糎、横一七・〇糎

表紙、欠

外題、なし

内題、「いつく島御縁起」(本文別筆か)

料紙、斐楮交漉紙

丁数、二〇丁

行数、九く一一行

字高、約二一・〇糎

印記、なし

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」括弧・欠損による不読記号(□)等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので(ママ)は記さなかった。

本年二月、松本隆信先生が亡くなられた。昨年十二月に、最期にお目にかかった時、架蔵の何点かを御覧いただいた。『蔵島の本地』は先生も御所蔵のせいにか、本書を「近世初期でいいでしょう」とおっしゃりながら、しばらく御覧になっていただくを思い出す。私事ではあるが、付け加えさせていただく次第である。

いつく島御縁起（上）

そもく、此ほんは、あきの国敵しまの御多んき、むかし、ほうけん二ねん三月十六日に、平家のあつそんそうこくきよもり、いつくしま御宮作りを思召たつ。ころは、みきにかきしるすなり。此多んき、御ほうてんに、かきおさめ給ふなり。ころは、ちこうくわんねんなり。此ほん、おんなおつとによらす、あしき足あしき手などにて、いろふへからす。うたかいてある人は、しそんをたやし、その身にあしきやもふをさつつけ給こと、うたかいなし。されは、大明神御ちかいに、我ねんするともからは、かうせんのふつき、しそんはんせううたかいは有へからす。せうえんの弁才天とけんし、一切衆生のしやくわん、なんそまんそくせさらんや。諸仏のちひのほんぢなれば、くわんおん大し大ひの御せいくわんこそ、よにすくれおわします。あくまをはらい、諸仏たう仏法をしゆこし給ふこそ、たのふるゝてんすくれたりとて、いつくしま大明神とけんし申成り。此ほん一度よみ、又人にほとこす人は、十と御まへにさんけいしたるよりも、まされりとの御せいくわんなり。女の身にて、さい

く御まへに参り申事成かたし。此ほん老年に一度二どよめは、子そんはんせう、後生まてうたかいなし。ふつきと成なり。

さる程に、いつくしま大みやうじんと申奉るは、我かてふすいご天皇のきやうに、たんせう五年甲さる、十二月十三日、につほんあきつしま、せんやうとう、あきの国さゝいのこうり、とかけのむらに、衆生さいとのために、あとをたれたまふ。

かの大みやう神の御本地、くわしくたつね奉るに、むかし、てんちくに、十六のたいこく、五百の中国、十せんのせうこくは、□りやうそくさんこく、其中に、一の国あり。と□せう国となつく。一人のわうじあり。御□□とうせんわうと申ける。

天ちくのならひにて、□□のきさきまします。此君、大りを立給ひ、壺□つ、日をかゝさすみゆきなせましますに、三月中しゆんのころにや、なんてんに立給ふ、四方の気々をくわんししますに、しやくせんたんのみそきなる枝に、つはき、すをかけたるを御覧して、「あわれ成るかな。生れて七十五日、わかれてのちは、おなしはをならべす。むまれぬれと、親子のたぐひを知らす。いわんや、まろは、たい国の皇として、千人のきさき持ながら、今まで子のなかるらん」と、仏神にいのり給ひけるに、一人のきさき、御くわい人にならせたまひ、月のかすつもり、御たんせう有。わうしにてそましくける。

すでに七才にて、御位につき給ふ。御名は、せんさいわうとそ申ける。十三と申には、大国のならいにて、先百人のきさきをそなへ奉るへきせんきあり。

また、此君には、八十二代つたわりたる御たからあり。別のものにてあらず。扇にて候成り。三つのゑあり。壱つには、ゐながら大千世界目のまへにかき、一には、こんていのほけ経をかきうつし、一には、天下だいののみめよき女房を書うつす。

此わうぎを、大皇、御手をはなし給ふ事なし。何としてか、しばらく御手をはなしおかせ給ひけん、せんさいわう、とり給ひ、たゞ一め御覧しければ、誠にうつくしさがぎりなくおほしめし、はやくくらいをうけとり、此わうぎを我か俣にせはやと思召。

扱、此わうぎの中の女房、御こゝろにかゝり、御のふとならせたまひ、すてに、日数つもりけるに、大りのさわぎと成る。

大わうもきこし召、大きになげかせ給ふ。「何事にて、わつらわせたまふにや」とせんじあり。是は、扇の中の女ほう、うわのそらにこひたまい、人知らずして、日数すきさせ、くきやうてんに、人常には参り、くわんかくをはしめ、なぐさめ奉る。

扱も、くわげん過ぎければ、御口すきみ候つるを、有臣下聞とゞめ、大りへ参り、大わうへ申奉る。「いかにや、聞しめせ。せんさいわうの御のふ、べちの御のふにてまします。こよひ、くわんかく候つる、御口すきみに、まさしく恋の御こゝろと見へ奉る」と申ければ、大わう、聞しめし、「やすき事。たとへ、

此大王、千人のきさきの内にてもある、又は、天下ならびの国の事ならば、たつねてまいらせ候へし」と、せんじ有ければ、是は扇のゑを恋給へは、御へんしなし。

去程に、有しんか、申たてまつるは、「扱も、此扇のゑ女房と申奉るは、いにしへのびしやもんの御妹、きちじよ天女と申

人を、うつしかきたると承る。夫は、いにしへの事。いまは、なのみ残りてぬしはなし。おもひ留り給ふべし。扱も、是よりにしに国あり。其国の皇の御名は、てん一ほうとそ申。三はんに当りたまふ姫宮と申こそ、天下第一のみめよき女房とは申」と語り奉る。

扱も、御のふかぎりで見へ給は、又、君に八十二たびつたわりたる御たからに、つばさの候けるが、かしらはしらく、ははくろく、身はあおし。はしはあかし、足はき成り。五しきなれはとて、五てうとは名付けたり。

扱も、せんさいわうの御まへに、かの鳥参、申けるは、「いかにや、我か君様、何おかさのみなけきましますぞ。そもく、かのさいぜう国とのみちは、六年なり。行かへり十三年、おもへはやすき間なり。去ながら、此道は、海上まんくとして、宍ところにて、やすむへきたよりなし。其上、我は御身一のたから成り。我むなく成るならば、きみ大事成り」と申ければ、いよく御なけきとなり給ひける。

おりふし、うづきのはじめ、山ほとゞぎすの、くもいはるかにおとつれば、

さつきやみおとづれてゆくほとゞぎす

恋ひするまろに声なきかせそ

と、かやうになげきたまへは、五てう、見奉り、又、御前に参りて、申やう、「あさらは、御たまづさをあそはせたまいて」申ければ、せんさいわう、「なんじ、われに一大事のたから成り。いかゞあるへき」とおふせければ、「かやうの御たびちに、きみに命をたてまつるも、おなし御事成り。十二ねんの間、せ

つなの事なり。たのもしくまぢ給へ。いそぎ、御玉づさをあそはせて、下され候へ」と申せは、なのめならず御へいらんあり。ころろきの墨すりながし、筆を染め、くれないのたんし、引かさねて、一紙を遊ばしける。

くさにだにまた見ぬ人の恋ひしきは

むまれぬさきのちきりなりけり

行ゑ知らすとあそばして、五てうにたまわりける。五しよ、うけ取、ひたひのはがひにおさめ、御ぜんをたちぬ。

さて、かのたびにおもむき、とびゆく程に、海上まんとくとして、くものなみ、くむりのなみをしのぎ、ひるは、日の入方をにしとおもひ、夜は、しそこのほしのめにかけて、あけくれとひゆく程に、都を出て五十日と申に、にしよりふきくる風はげしくて、はかひもさがり、身もつかれ、ころろもよわく成りければ、「我は是、とうせう国のせんざいわうの御つかいなり。いかてか、せんしを、むなしく此かいていのもくずとなすべきや。たよりをあたへたまへ、龍神」とよばわりけり。

龍神、あわれとおぼしめし、まんこうのとしつもりたるりやう、うき出て、島と成る。五てう、はをやすめ、こけをむしりて、うゑをやすめ、又とひゆくほとに、八十五日と申には、西せう国へ着にけり。

扱も、天一わうの大りに参り、はなそのしたに、三日遊ひける。三日と申早天に、なみのかすみと申にやうぼう、是を見て、あし引の宮へ申やう、「いまだ見なれぬ、うつくしき鳥、はなそこに遊ひ申」。

姫宮、みす打あけさせ、御覽し、「是や、此仏の国有と聞、

くじやく、おうむ、かりやうびん、きんしやてうとは、是や覽」とおほしめし、彼五てう、文を御まへにおとし奉れば、ひめみや、何となくとりあげ、御らんじければ、なんゑんふたいせう、あめがしたにまします、せんざいわうの御たまつさ成り。

「中く返事したりとも、此世のちぎり有へからす」と、ありければ、また、ある女たち、申されけるは、「うたのへんじなき人は、七度、口なきむしとむまるくと申成り」、御返事、

ますかゝみかげみながらにこかれきて

我が身もそらに成りぬへきかな

とあそばし、又、五てうにつけたたまへは、御前をたち、さきのいわのこけ、くすりと成り、ちからも付て、百七十日と申に、とうぜう国へそかへりける。

せんざいわうに、せんし奉る。なのめならず悦びて、御ゑいらんに、誠にうつくしく、もじのならばもなつかしくまします。いま一しほの御おもひまし給ふ。たゞおふよりほかのくすりはなし。いよく御のおおもくならせたまふ。

春夜の御夢に、千人の大工めしよせ、千本のくわの木切り寄、本切のふとぎにては、くぜいの舟を作り、すへのほそきにては、忍びのくるまを作りたまひて、くるまには天わうめされて、五てうはながへに参りたまは、舟もくるまも、ばん里をとぶべしと御らんして、ゆめさめにけり。

せんざいわう、なのめならずによるこひ給ひて、千人の大工を召寄せ、千本のくわの木をきり寄て、程なく、くせい舟、くるまを作り、舟には、くきやうしんかのせ、くるまには、天皇めされ、五てうのなかへにまいり、はるかのなみぢを行たま

へは、百十万のいかつち、おちかゝることく、なみ風あらくふきければ、せんかたなくおほしめし、龍王へ申給ひけるやう、「我は、これ、とうせう国のあるし成り。龍神もあわれみたまへ」とありければ、浪かせしつかとしづまりて、舟もくるまも、さいせう国へそ着にけり。

さても、てんにちわうの、ひるねおめされし御ゆめに、としのよわひ、二十ばかりのしやうろうの、けんわうのおもひにうちしおれたるふせひにて、うちのほとによりかゝり、なみたぐみたまいてわたらせたまふと、御らんして、うちおとろきたまへは、また、めしつかわせ給ふ、しつのも、物につひて、てんちにふして申けるは、「いかにや、我かきみさま、かくうちとけてましゝ候ぞ。とうしやくのせんさいわう、此ごすひてんにおわします、あしひきの宮お、こひかねて、たゝいま、わたらせ給ふなり」と申せは、てんわう、きこしめし、御むさう、しつたくせん、おもひあわせてはんへり。これは、なたかきわうときこしめすとて、大りおたてたまひて、いろゝの御まふけとり待給ふ所に、しつか申ことく、くるまをはゝからず、なんりやうてぬに入たまふ。いろゝの御もてなし、かきりなし。此ほと御いのり、御神楽、七日に、又御もてなしかきりなし。くわけんすきければ、ごすひてんへ御つかひ有。御返事は、「いま三ねんはかな候まし。みせのしよふつへ、たひくわん候」とありければ、大わう、きこしめし、「あるましきことなり。はるかにわたらせ給ふきみを、いかてか、久しくおきまひらせ候へき」とて、一日はかうしをへたて、二日はみすおへたて、三日はおなしきちやうへわたらせ給ふ。

さても、御ちぎりあさからず、てんにあらはひよくの鳥、ちにあらはれんりのゑた、かみならはむすぶの神、あひせんめうわうちきり給へは、三年のすぐるはゆめなり。

くきやう、しんか、申されけるは、「いかに、我かきみ、すでに、とうせう国おいてたまひて、三年にはやなりぬ。とう国には、きみ御かへりなきとて、天下のなけき、国のさはきにて候はん。あわれ、くわんきよあるへき」よし申されけるに、「ひめ宮にはなれて、かたときもあるへからず」と、せんしあるければ、五てう、まいりて申やう、「きみわ、十せんまんしやうの御身にいたします。なにとも御たはかり候はぬそや。ひめみやおすかしまひらせ、きみくわんきよあらは、さためて、たひの御いのりの御かくらとて、なかるしころの御まつりことあるへし。そのまきれに、「我が国へわたりしとき、のりてまいりたるくるまの、たくみおも御覽せよ」と、御ものかたりにて、ひめ宮の御手に手をくみ、くるまへのせ参らせたまわは、くきやうしんかも忍ひ出、舟にのりたまふへし。五てう、なかへにまいり候へし」と申せは、「そのき、しかるへき」とて、いろゝすかしたてまつり、くるまに引のせ、舟も程なくいてければ、ひめ宮は、「ごすひてぬをいてゝ、おそくなり候。かへらん」とのたまひ、御くるま、ものみ、ひらきてみれば、かいしやうまんゝとかや、これを御覽して、「こはいかに。われをは、いつくゑともなひゆくやらん。あわれみのちゝ、かなしみのほゝをふりすてゝ、これはいか成よの中そや」と、たへいり、こかれなきたまふ。

せんざいわうは、「あわれみのちゝとも、かなしみのほゝと

も、我をたのみたまひ候へ」とて、いろ／＼すかしなぐさめたてまつり、なみのはるかにすぎ、かの五てう、ひとはあをげは、ふねもくるまも、ばんりをとふことくなり。日数つもり、はや、とうせう国へつきにけり。

やかて、なんてんに御くるまをすへ、物見うちあけ見給へは、さいしやうこくは、くもいはるかに成りにけり。ひめみや、なけき給ふにちからなし。「われち、大わう、は、きさきのお、せに、「いきてのきやうやうには、いちにちにさんど、我にすかたを見せたてまつるへし」とお、せありつるに、父母の御なけきを、いか、すへき」と、天にあをき地にふして、かなしみたまふ。いまは、なけきてかひもなし。ち、大わう、は、きさき、たひのそらの御いのり、御かくらはしめ給ふ。

さる程に、とうせう国の大わう、お、せられけるは、「千人のきさきたち、日をかゝさす、五十人つゝゆきたまひて、なくさめ給へ」とありければ、きさきたち、ゆきて、見まいらせたまへは、まことに、あたりもかゝやく程のことなり。御すかたお見れば春の花、かたちを見れば秋の月、十はらとをのゆひまでも、るりをぬへたることくなり。

さて、千人のきさきたち、寄あつまり、お、せけるは、「此きみ、大わう、御らんじて、我らはものゝかすならすなるへし。大わう、御らんせぬさきに、なにとして、うしない申さはや」とて、てんにあをき、せんきし給ふこそふしきなれ。

扱も、御すかたをつくりあらわし、あかきころもをきせ、七しやくにあなをほり、さかさまにうづめ、たけのたかきおんなを、かみをきり、大わうにはなし、ときもつくりて、てうふく

したまふとも、とかなき人なれば、あひたまわす。

その中に、せんざいわうの御は、「我は、みめわろくことは、せん／＼のつみふかきゆへなり」とのたまへとも、千人のきさき、とうしんにすゝめけれ、ちからなくしておわします。

さても、まかたこく、はらないこくのさかい、ゆきかた五十年、すきしこと五十年お、かゞみにかけて見るやうなる、はかせをめしよせ、お、せけるは、「われら千人、こと／＼くそらむねをやむべし。其時まいり、うらなひ申へき」、くわしくおしゑふくみたまへ。

千人のきさきより、一ひきのきぬ、一りやうのこかねをいたし、かのそう人につかわしける。むかしもいまも、よくにまかせぬ物はなし。りやうしやう申てかへる。

千人のきさきたち、一とにむねをやみ給ふ。大り、物さわかし共おろかなり。大わう、お、きにおどろきて、千人のきさき、申されけるは、「まかた国とはらないこくの境にこそ、誠のそう人あり。かれをめしよせ、うらなわせたまへかし」と申されけり。

やかて、おんみやうしおそ、召れける。御たつねにより、かねてこしらゑたる事なれば、「此御やまひは、大事也。拾貳年には、かならず、皆すぎさせたまふへし。此くすりに、これよりほつこくに、きまんこくと是をゆふ、鬼のすむ国也。きまんこくとなつく。かた道六年、ゆき十二年也。彼国山あり。ちやうさんと申おる。やくしそうと申くすりなるくさ、これは、おにか、たい一のきうとす。これ、たゝ人のとりたまわんか、くすりに成へし」とそ、うらないける。

大わう、きこしめし、せんさいわうへちよくを立、はかせうらない、くわしく物かたりある。たゞ老人のきさきおもひに、千人の命をかへさせたまふへしか」と、なけきたまへは、せんさいわう、きさきたちの御たくみは、ゆめも知りたまわす。大わうのちよくめにそむく事かたし。

我が大りへかへり、きさきへ、此よしのたまひて、其時、ひめ宮おゝせけるは、「御身老人ならては、たのむ人もなし。我はたれにあつけ給ふそ。我をもとないましませ」とありければ、せんさいわう、「されはこそ、此たひと申は、行き十三年なり。おにの住国なり。夜ひるがひまなし。此くすりをは、みめよきおとこ千人に、替りて取とうけたまはる。御身老人しては、叶ひたまふへからず。きこくよりかへりたまふへき事かたし」とて、かなしみこかれおはします。

大わうのせんじなれば、そむきがたくおほしめし、「十二年、ゆきゝおもへは、ゆめかならずまちたまへ。頓而、帰り見まいらせん」と、御こゝろつよくいてさせたまふ。

きさき、なみたにむせはせたままい、一しゆ、かへるともかひもあらしなしらなみの

たちなんのちはきみと見るへき
とて、ふしまろひたまへは、せんさいわう、御へんしに、

いまこんと思ひていするわかれたに

かなしかるへきけさのあさほの
と、あそはして、きやうこうならせたまふ。

扱も、千人きさき、なのめならずによるこひて、あさかゝいと申わらんへをかたらひ、かすの小袖とらせ、「せんさいわう

の大りへまいり、此うたゑいじあるくへし」とおしへたまふ。うたにいわく、

あさか山ひかりさやけきたまのゐに

しばしのかげをやとるひめ宮

きさき、おしへのことくに、彼あしひきのなけき給ふたいりへ参り、常に此うたをゑいじけり。

扱、千人のきさき、引つれて大りにまいり、おゝせけるやうは、「おんなほとなる、つたなき物はなし。きのふまで、せんざいわうのすみたまふ大りへ、あかさ山をいれ、ふみけがしたまふ」と申されければ、大わう、「あるましき事かな。父母、こきやうをふりすて、老人たのみたましいし、せんさいわうにもはなれ、なけきの中成り。五十人三十人つゝも、よりあい、なくさめ、ともない奉れ。ことはなく、けつく、しんしつなき事をゆひつけ給物かな」とおゝせければ、ほひなけにて、おのくかへりたまひぬ。

扱、いかゝすへきとて、あんしわつらい給ひける中にも、あるきさき、申されけるやうは、「あらせなき物の手にわたし、うしない申さぬ」、「もつとも」とて、六人めしつれ、いろくくの御小袖つかわされ、「扱も、よきにうけたまはれ。せんさいわうの、ふすまのせんしをかenate、これよりはつかにゆきつく、しん山あり。からひくせんとはをゆふ。其山に、きんとうかみね、じやくまくのいわと申所へ、引上げ、くひきりてまいり候へとのせんしなり」とて、ことかうしと申つるぎ給はりけり。さて、物のふ、せんさいわうの大りに、参り申けるは、「いかにや、きさき、きし召せ。すてに、大わうの、ふすまの

せんじにて候。とくく此大りをいてたまひ候へ」との申やうなり。

きさき、聞召、「これはゆめかや、うつゝかや。何と成りゆくよの中そや」と、かなしみおはしませは、ものゝふ共、「ぢこくうつしてかなふまし」とて、すてに、大床に上り、にしきの御しとねをふまんとす。

きさき、御覽して、「いかに、たしかにうけたまはれ。我か身こそ、くわほうつたなき身なりとも、きのふまでは、一天の君のすませたまひし玉の床を、なんちらは、いかで、けかすへき」とて、十二ひとへのくれなひのはかまのそはおとり、こんていのほけきやう、五のまき、はんくわん計よみかけて、御手にもちたまひて、いてさせ給へは、十五やの月の、山のはいてたまふことくなり。まことに、あたりもかゝやくはかりなり。御ても、ひすひのかんさし、たまのすたれにかゝりて、ひかへさせ給へは、はつしたまふとて、御なみたの下より、一しゆ、

(終)